

売春婦リゼット

岡本かの子

青空文庫

売春婦のリゼットは新手あらてを考えた。彼女はベッドから起き上りあがぎま大声でわめいた。

「誰かあたしのパパとママになる人は無ないかい。」

夕暮は迫っていた。腹は減っていた。窓向まじむこうの壁がかぶりつきたいほどうまそうな狐き色つねいろに見えた。彼女は笑った。横隔膜おうかくまくを両手で押おさえて笑った。腹が減り過ぎて却かえって

おかしくなる時が誰にでもあるものだ。

廊下越ごしの部屋から椅子直すしのマギイ婆ばあさんがやって来た。

「どうかしたのかい、この人はまるで氣狂きちがいのように笑ってさ。」

リゼットは二日ほど廉葡萄酒やすワインの外ほかは腹に入れないことを話した。廉葡萄酒だけは客のためクロゼットに衣裳戸棚の中に用意してあった。マギイ婆さんが何か食物を心配しようと云いい出すのを押おえてリゼットは云った。

「あたしややけで面白いんだよ。うつちやつといておくれよ。だがこれだけは相談に乗つとお呉くれ。」

彼女はあらためてパパとママになりそうな人が欲ほしいと希望を持ち出した。この界かいわ隈いに在あっては総すべてのことが喜劇の嚴げんしゆく肅性をもつて真面目に受け取られた。

マギイ婆さんが顔の筋一つ動かさずに云った。

「そうかい。じゃ、ママンにはあたしがなつてやる。そうしてと——。」

パパには鋸のこぎり樂師のおいぼれを連れて行くことを云い出した。おいぼれとただ呼ばれる老人は鋸を曲げながら弾ひいていろいろなメロディを出す一つの芸を渡世とせとして場末ばすえのキャフエを廻まわっていた。だが貰もらいはめつたに無かつた。

「もしおいぼれがいやだなんて云つたらぶんなぐつても連れていくよ。あいつの急所は肝臓さ。」

マギイ婆さんは保証した。序ついでに報酬ほうしゅうの歩合ぶあいをきめた。婆さんは一応歸つて行つた。

リゼットは鏡に向つた。そこで涙が出た。諺ことわざの「ボンネットを一度水車小屋の磨ひきうす臼うすに抛ほうり込んだ以上」は、つまり一度貞操ていそうを売物にした以上は、今さら宿命しゆくめいとか身の行ゆ末くすえとかそんな素人臭しろうとい歎なげきは無い。ただ鏡がものを映うつし窓掛まどかけが風にふわふわ動く。

そういうあたりまえのことにひよいと気がつくとは何とも知れない涙が眼の奥から浸潤にじみ出るのだ。いつかもうこういう事ことがあつた。

掛布団かけぶとんの端はしで撥ねはられた寢床人形ねどこが床に落ちて俯向うつむきになつていた。鼻を床につけて正直にうつ向きになつていた。ただそれだけが彼女を一時間も悲しく泣かした。

涙と寝垢ねあかをリスリンできれいに拭き取ってそのあとの顔へ彼女は「娘」を一人絵取り出した。それは実際にはありそうも無い「娘」だった。曲馬きよくばの馬に惚ほれるような物語の世にばかり棲み得る娘であつた。この嘘うそを現在の自分として今夜の街に生きる不思議を想おもうと彼女は嬉うれしくて堪たまらなくなつた。彼女はおしろいを指の先に捻ねじつけて鏡の上に書いた。

「わたしの巴里パリ！」

マギイ婆さんとおいばれがやって来た。二人とも案外あんがい見られる服装をしてやって来た。この界限かいがいの人の間には共通の負けん気があつた。いざというときは町の小商人にヒケはとらないという性根しょうねであつた。その性根で用意した祭の踊まつりに行く時の一いち張羅ちょうらを二人はひつぱって来た。白いものも洗濯したてを奮発ふんぱつして来た。

三人はそこで残りの葡萄酒ワインを分けて飲んだ。

「わたしの今夜の父親のために。」

リゼットは盃さかずきを挙げた。

「わたしも今夜の愛する娘のために。」

鋸のこ楽師がくしは肝臓おきを押えながらぬかりなく応答した。

リゼットはマギイ婆さんに向つても同様に盃を挙げた。それに対して婆さんは盃を返礼した後云つた。

「だがこのもくろみをレイモンが知つたら何と思うだろうね、リゼット。」

リゼットはさすがにきまりの悪さを想像した。彼女の情人は一さい「技術」というものを解さない男だった。彼女は云つた。

「まあ、知れるまで知らないことにしようよ。あいつに玄人のやることはめつたに判りやしないから。」

三人は修繕中のサン・ドニの門を潜つて町の光のなかに出た。リゼットの疲れた胃袋に葡萄酒がだぶついて意地の悪い吐気が胴を逆にしごいた。もし気分がそのまま外に現われるとしたら自分の顔は半腐れの鬼婆のようなものだろう。彼女は興味を持って、手提鞆の鏡をそつと覗いて見る。そこには不思議な娘が曲馬団の馬を夢みている。この奇妙さがふたたびリゼットへ稼業に對しての、冒険の勇気を与えて彼女は毎夜のような流眇を八方に配り出した。しかも今夜の「新しい工夫」に気付くと卒然と彼女の勇気が倍加した。

リゼットは鋸樂師の左の腕に縋つておぼこらしく振舞うのであった。孤独が骨まで浸

み込んでゐる老樂師はめずらしく若い娘にぴたと寄り添われたので半身熱苦しく煽られた。彼はそれを防ぐように左肩を高く持上げ鼻の先に汗を掻いた。うしろから行くマギイ婆さんは何となく嫉妬を感じ始めた。

ポアツソニエの大 通 はもう五色の光の槍襖を八方から突出していた。しかしそれに刺され、あるいはそれを除けて行く往来の人はまだ篩にかけられていなかった。ゴミが多かった。というのは午後十一時過ぎのように全く遊び専門の人種になり切つていなかった。いくらか足並に余裕を見せている男達も月賦の衣裳屋の飾窓に吸付いている退刻女売子の背中へ廻つて行つた。商売女には眼もくれなかった。キャフェでは給仕男たちが眺めのいい窓の卓子へ集まつてゆつくり晩飯を食べていた。当番の給仕男が同僚たちに客に対すると同様に仕付けよく給仕していた。

「今日は遊びかね。」

という声が出た。すぐそれは探偵であることが判つた。リゼットは怖くも何とも無かつた。この子供顔の探偵は職業を面白がつていた。リゼットが始めて彼に捉えられてサン・ラザールの館——即ち牢屋へ送り込まれるときには生鳥の鶉のように大事にされた。真に猫を愛する猫人は獲ものを残酷に扱うものではない。そして彼女が鑑札を受け

て大びらで稼ぎに出るとなるとこの探偵は尊敬さえもしてくれた。尊敬することによって自分が一人前にしてやった女を装飾そうしよくすることは職業に興味を持つ探偵に取って悪い道どうらく樂ではなかった。

「可愛い探偵さん。鑑札はちゃんと持っていてよ。」

リゼットはわざと行人こうじんに聞えるような大きな声を出した。

「ああ、いいよ、いいよ、マドモアゼル。」

彼は却かえつて面喰めんくちった。だがその場の滞とどこおりを流すように、

「今日は僕も休日さ。」

といつてちよつとポケットから椰子やしの実を覗のぞかして向うへ行つた。多分たぶんモンマルトルの祭まつりの射的しやてきでも当てたのだろう。

モンマルトルへはリゼットは踏み込めなかった。ポアツソニエの通りだけが彼女に許された獵区りようくだった。その中でもキャフェ——Rが彼女の持場もちばだった。この店へは比較的英米客が寄り付くので献立表こんだてひょうにもクラブ・サンドウィッチとか、ハムエッグスとかいう通俗な英語名前の食品が並べてあつた。

客が好んで落ちつく長椅子ソファの隅すみ——罨わなはそこだ。その席上を一つあけて隣の卓子テーブルへ彼

女の一隊は坐^{すわ}つた。

彼女に惚^ほれているコルシカ生^{うま}れの給仕男^{ギャルソン}が飛んで来て卓子を拭^ふいた。

「注文はなに？　ペルノか、よし、ところでたつた今、レイモンがお前^{たす}を尋ねて来たぜ。」
彼は何でも彼女の事を知っていた。彼女の代^{かわ}りに彼が金を貸してやった。

「どうせお前は持つてやしまいと思つて。」

商売仲間の女がそろそろ場を張りに来た。毛皮服のミアルカ、格子縞^{チエック}のマルゲリット。
そして彼女等^らはリゼットを見るや「おや！」と云^いつた。「化^ばけたね。」とも云つた。

巴里^{パリ}へ来る遊び客は近頃商売女に飽^あきた。素人^{しろうと}らしいものを求める。リゼットのつけ
目はそこであつた。

パパの鋸^{のこ}樂師^{がくし}と、ママンのマギイ婆^{ばあ}さんが珍らしそうに英語名前の食^くものを食つてい
る間^いに入り代^{かわ}り立ち代^{かわ}り獲^えものは罨^{わな}の座についた。しかし、英吉利人^{イギリス}は疑い深くて完全に
引つかからなかつた。アメリカ人がまともに引つかかつた。

巴里は陽気だ。

見せかけのこの親子連が成功するかしないかと樂屋^{がくや}を見抜いた商売女たちや店の連中、
定連^{じょうれん}のアパシユまでがひそかに興味をもつて明るい電気の下で見まもつていた。そ

して三人がいよいよ成功してそのアメリカ人を取巻いて巢へ引上げようとかかるとみんな
一齊に、

「家族万歳！」

と囃した。その返礼にリゼットは後を向いて酒で焦げた茶色の舌をちよつと見せた。

アメリカ人を巢に引き入れて衣裳戸棚の葡萄酒の最後の一本を重く取り出した時リゼットは急に悲しくなった。

レイモンは何してるだろう——彼女は自分に苦勞させてはぶらぶら金ばかり使つて歩く男がいとしくまた憎らしくもなった。疲れが一時に体から這い出した。

マギイ婆さんは鋸樂師のおいぼれを連れて自分の部屋へ引きとつた。彼女は妙にいらいらしていた。なんとかかんとか鋸樂師を苛めて寝かさなかつた。おいぼれは一晚中こごんで肝臓を庇つていた。

青空文庫情報

底本：「愛よ、愛」パサージュ叢書、メタローグ

1999（平成11）年5月8日第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第十一巻」冬樹社

1976（昭和51）年7月15日初版第1刷発行

初出：「三田文学」

1932（昭和7）年8月号

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2004年3月30日作成

2013年10月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

売春婦リゼット

岡本かの子

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>